

ステージ4でも長期生存する肺がんがある

文 濱元 誠栄

text by Seiei Hamamoto

私が医者になった20年前は、ステージ4の肺がんに対して抗がん剤治療を行っても1年は生きられないという状況でした。その後新しい抗がん剤が出現し、やっと生存期間が1年を超えてきたというあたりで、従来の抗がん剤とは作用が異なる新しい薬が登場しました。

「イレッサ」という名前を聞いたことがあるでしょうか。イレッサは、「飲み薬で外来通院が可能」「ステージ4でも肺がんが完全に消えた」ということで「夢の新薬」として取りあげられました。しかし、副作用の間に肺炎で死亡する例が出てきたうえに、海外の臨床試験では抗がん剤治療と生存期間の差がなかったというので、逆に叩かれるようになりました。その後の研究で、「ある特徴を持った患者にだけ効く」ということが分かり、再び注目されるようになります。ある特徴とは、がん細胞の増殖に関わるEGFRというタンパ

ク質の遺伝子の異常です。日本人の肺腺がんの患者のうち約半数はEGFR遺伝子の異常を持っています。アメリカ人では10%ほどです。つまり、イレッサは日本人には効く患者が多いが、欧米人にはほとんど効かない薬だったという訳です。

抗がん剤ががん細胞も正常細胞も区別なく攻撃するのに対して、イレッサなどの分子標的薬と呼ばれる薬剤は、特定の遺伝子の異常があるがん細胞だけをターゲットにします。現在では、肺がんの遺伝子異常が多数見つかり、そのうち4種類は対応した分子標的薬が保険適応となっています。分子標的薬は効率的にがん細胞を狙い撃ちできるため、奏効率が高く、副作用は抗がん剤と比べて軽いという特徴があります。例えば、ALK遺伝子変異*を持つ肺腺がんですと、分子標的薬は奏効率が90〜100%、生存期間（中央値）はなんと50カ月もあります。EGFR遺伝子を持った肺腺がんの場合は、複

数の種類の分子標的薬が存在し、一つが効かなくなったら別のものを使用するなどして、5年以上生存しているケースもあります。これらは全て、ステージ4での話です。

*ALK遺伝子変異、ALK遺伝子が他の遺伝子と融合し、がん細胞を増殖させる

Profile

沖縄県宮古島出身。2001年、鹿児島大学医学部卒業後、沖縄県立中部病院、杏林大学医学部、茨城県地域がんセンター、沖縄県立宮古病院、宮古島徳洲会病院を経て、がん治療・再生医療の道へ。2018年、銀座みやこクリニックを開業し、がん患者へのセカンド・オピニオン、遺伝子治療や免疫治療を行っている。日本外科学会専門医、日本形成外科学会、日本癌治療学会、日本再生医療学会認定医、日本禁煙学会指導医。著書に「がんよろす相談室 [20のエピソード]」（医事出版社）。

銀座みやこクリニック 東京都中央区銀座3丁目10-15
東銀2ビル6階
03-6228-4112 <https://gmcl.jp>

